

大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して（二七五）

文・出水 康生

戦国おもしろ百話

祖霊の慰霊、風流傘を依代として

戦後七〇年の争鳴、阿波踊りの原点

蟬の鳴き声

戦後七〇年、高校野球一〇〇年、何かと周年の節目で平和の恩恵の中で共生・共食・共栄・共鳴・共感をする。

今年の八月初旬の猛烈な猛暑、猛の字の重ねがふさわしく、熊蟬が我が家の庭木で早朝より争鳴して、共生・共存・共栄、かくあるべしと許容して、時々の寝転がり、八朔の喜寿誕生日を懐旧・恩情の人たちに祝福されて感謝。



「勝瑞城館まつり」で風流傘



風流傘を依代としての風流踊り



大西智城師による迎え火



街角おどりの風流



都連の依代の傘

その蟬の鳴き声が阿波踊り（十二日～十五日）を一期として一変する。異常では？と警戒する。阿波踊りの初日が八月になつての初めての曇天・小雨模様で猛暑が去った。それで熊蟬の鳴き声が弱くなる。そして阿波踊りの狂騒が終わつた翌日の早朝にツクツクボーシの法師蟬が庭木で孤独の鳴き声をあげた。阿波踊り期間を挟んで、これほどの温度差の日々が続くのは異常ではないか、とする。お盆を

過ぎての朝夕の涼風に時の移ろいを肌身感じて、宿題を消化した、小中高の時代へのノスタルジア。

能と阿波踊り

出水市の中村郁夫さんが阿波踊り見物に来られ、拙宅に一泊。本誌に執筆中の三好・織田・豊臣・徳川の四代を生きた横田内膳正村詮の数奇な生涯の探求の依頼者であり、第二の故郷の伯耆（鳥取県）の赤崎に祖霊の法要に行かれ、さらに長

駆して十五日の午前に着。肥後金春流伝承の中村勝さんの肥後高砂やの「銘菓・十七里」と薩摩亀萬酒造の限定品の「コクうま純米酒」「にがり原酒」を、おみあげとしていただいた。中村郁夫さんはこの四月一日に資料、写真を持参されての来宅からの再訪。議論風発の薩摩武士で、独自の見解を話し始めるとどまることがない。それが、達見であることに敬服する。その達見の一つが前回来訪の時に徳島県庁の横を通過して、群列するヨットの繫留に驚嘆され、徳島に有って他に無いのは月刊される『eojia誌』と県庁前のヨットの群列と断言された。奇しくも、松本芳明社長の六十五歳での逝去による経営合理化によって『eojia』が本からHPに転換された月のことで

あった。

今回の達見は、BS放送の阿波踊りを鑑賞しての予習から南内町演舞場に案内しての豪快な「ぞめき」を見ての後に発せられた「能と阿波踊りの基調は同じである」とのこと。連続して演舞場に踊り込む阿波踊り連の衣裳・意匠工夫の踊りを見られ、能楽五流（観世・宝生・金春・金剛・喜多）の仕舞が九割以上の基調を同じくするのと同様に阿波踊りの男女の踊りも囃子のリズム・音調を同じくし、手足振り・身振りも八割方は同じ基調であることに気付かれて教示された。達見であると敬服して納得。

依代の風流傘

阿波踊りの原点は祖霊の慰霊の念佛踊り・精霊踊りの「盆踊り」である。精霊

棚を設けて迎え火をして祖霊を迎えて共食、供養して送り火をする。今年も八月十一日の午後七時、十五日午後九時に「街角おどり」の提灯が輝く阿波踊りの達人の四宮生重郎邸前で願城寺の大西智城師による厳肅な迎え火・送り火の法事をする。

「光明真言」が参集の人々で合唱される。そして同志・有志の一二〇名が一丁廻りの踊りを展開する。それが『徳島新聞』（八月一二日朝刊）に「人も街も高まる鼓動」の大見出し、「情熱豊かに街角おどり、南新町一二〇人楽しむ」の小見出しで紹介された。その際の祖霊の依代として赤い大きな風流傘をかざし一丁廻りの「ぞめき」をした。

この風流傘は、五月十日の『勝瑞城館跡まつり』の特別ゲストで「三好長慶会武者行列。祝三好実休三好城



けん道連の依代の傘



無双連の風流踊り



天野忠幸さんの増補版と戦国遺文

館に凱旋」を挙行了した時に、同志の東條英機さんのアイディア・周旋によって披露され、祖霊の慰霊のための依代、象徴とされ、お気に入りとなる。

勝瑞から徳島へ

司馬遼太郎『街道を行く―阿波紀行』に書かれている。「阿波の殿様蜂須賀公が、今に残せし阿波踊り。そうだったのかどうかどうか、証拠はない。少なくとも、阿波踊りは家政が創めたわけではあるまい。阿波には、戦国時代から「フリーユウ（風流）」という華麗な集団踊りがあったのである。そのことは、三好氏の時代のことを書いた『三好記』を見ても想像できる。阿波の守護細川氏はつねに京にいた。このため室町の京文化が大いに入っていたのは自然なこと、阿波踊りの祖形も

また京のフリーユウだったのだろうことは、まぎれもない」と。京の風流踊りは孟蘭盆会の祖霊を慰める念佛踊り、精霊踊りに京の町衆がおもしろい趣向、仮装を加えて踊ったもの。それが阿波勝瑞から渡海して足利義維・細川晴元・三好元長による「堺幕府」が樹立され、さらに室町幕府管領として細川晴元が京に政権を形成する天文期に盛んとなる。そして、三好長慶が京畿・堺で頭角を現し、阿波・讃岐・淡路を本拠として兄弟姉妹・一族との協力を支えとして「環大阪湾政権」を形成する。それが織田信長の上洛の直前二〇年に戦国天下人になる。

天正六（一五七八）年の孟蘭盆の三好氏の衰亡の時に十河（三好）存保が京より能楽四座を招待し、飾った山車を引き出し、仮装した若衆が風流踊りを阿讃の老若男女に見せて堪

能したことが『三好記』に記録され、勝瑞城下・勝瑞三好城館で能・風流踊りが開催されていた。長宗我部元親の土佐勢によって天正一〇（一

五八二）年に三好氏が滅され勝瑞が焼滅する。天正十三年に豊臣秀吉勢によって四国平定戦が戦われ、蜂須賀正勝・家政の戦功が認められて蜂須賀家政が阿波国主に封ぜられる。蜂須賀氏は一宮城（徳島市一宮町）に入り、直ちに渭山・渭津と呼ばれた地に徳島城・徳島城下町を形成する。勝瑞から寺院が移され、商工町民が移住して城下の住民となった。勝瑞から徳島へ阿波国の中心地の移転でも歴史文化が伝承され、阿波踊りの源流の風流踊りも城下で踊られる。それが、徳島城落成の祝賀に踊られたとする一起源説ともなった。蜂須賀家政が阿波踊りを創めたわけではないが、京畿の風流踊りに大いに関心を持っていたことは岩佐又兵衛（荒木村重の遺児、浮世又兵衛と呼ばれる）に「豊国祭礼図屏風」を描かせたことが黒田日出男『豊国祭礼図を読む』（二〇一三カドカワ刊）によって実証されたことで断言できる。それは豊臣秀吉の七回忌に秀頼が京の町衆に支度金を出して豊国神社・方広寺で風流を乱舞させた風景である。江戸時代には蜂須賀氏の供華院の高野山

天野忠幸さんの精励

戦国三好氏研究の第一人者となつて大活躍する天野忠幸さんが『増補版・戦国三好政権の研究』（二〇一五・八・八、清文堂出版）を刊行された。二〇一〇年六、二四刊の「原版」が売り切れ、絶版となつたためである。原版の発刊は大徳寺聚光院での「三好長慶四五〇年遠忌（二〇一〇・七・四）」と期を一新にした。それが売り切れとなつたことは、我々の三好長慶顕彰の十五年年来の活動が天野さんへ多少とも応援となつているか、とする。『大日本史料』の空白を埋める三好氏関連の資料集『戦国遺文・三好氏編』の第一巻（二〇一三・十一・一〇）第二巻（二〇一四・十一・二〇）が東京堂出版によって、天野忠幸編で刊行されている。これらの天野さんの精励による成果が、誇るべき故郷の歴史の基礎となることの認識・紹介・広告・応援が然るべき立場の者によって積極的にされないことに、嘆息。